
The wolf sword memories

みつみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The wolf sword memories

【Nコード】

N8561M

【作者名】

みつみつ

【あらすじ】

世界でも有数の名刀である響狼の剣は、それを持つにふさわしい所有者達と数々の運命を共にしてきました。 実戦で使われ続けたこの名刀が、最後に迎える出来事とは？ 主人公はカッコよく！ ヒロインはかわいく！ ライバルにも魅力をもった！ 感想その他の書き込み歓迎！ 『RPGツクール』で作ったゲームを小説にしてみました。 ちなみに小説はド素人です

紅色の瞳の少女

「うわー！　なんだか楽しそうな村ね」

「オシヤレなお店がいっぱい！」

メイサは紅色の瞳が特徴的な女の子だ

金色の髪を隠すように、瞳と同じ色の海賊帽をかぶっている

「だろ？」

フリッツは得意げな表情になった

「ここは、溶鉄山を観光や巡礼に訪れる人達で成り立っている村だからね」

「町の景観を損ねないよう手入れが行き届いてるんだ」

「早い話、お客様を大切にしてくれてること」

「契約はこの村まで案内することだからね」

「溶鉄山にはボクは行かないよ」

デュートは肩に掛けた大きなバックを地面におろした

「ありがとうフリッツ、助かったよ」

「溶鉄山へはオレとメイサの2人で行くことにするよ」

「ねえ！あそこ！」

「行ってみない！」

3人は『名物！溶岩ソフト』と書かれた看板のほうへ歩き始めた

先頭は海賊帽の少女だった

・ ・ ・

「おい！ あの女がもってる剣・・・」

「ああ、ひよっとしたら本物かもしれないな」

「だとしたら、剣の資料集を書き換えちまうような代物だぜ？」

銀髪の青年の鋭い眼光が、海賊帽の少女のあとを追った

名物！ 溶岩ソフト

- - - The Wolf s w o r d m e m o r i e s - - -

名刀と呼ばれる剣の多くは通常博物館などに保管されることが多く
実戦で使われることはほとんど無いが

少女が持っている剣『響狼の剣』は所有者に恵まれたために
数々の実戦で使われ続けている数少ない名刀の1つだ

彼女もまた、剣に選ばれた所有者の1人なのだろうか？

・ ・ ・

「いらっしやいませー！」

「名物、溶岩ソフトはいかがですかー！」

デュート達がお店に入ると、黄色い声が店内に響いた

カウンターに進んだフリッツは、少しだけ恥ずかしそうに注文した

「3つください」

「あ、1つはトリプルで」

メイサは横目でフリッツを見て、少しだけ唇をとがらせた

「なに？ フリッツ」

「あなた、甘いものが好きなの？」

「わ、悪いかよ」

「おまたせしましたー」

「溶岩ソフト、1つはトリプルです」

「わー！」

「真っ赤なソフトクリームなんて初めて！」

真紅のソフトクリームは、メイサの瞳と美しく共鳴していた

炎神さまンジユウ

デユートはおみやげ屋さんの店内で、まんじゅうの箱を手にとった

「なにになに？」

「炎神さまンジユウ・・・」

「なんだかバチが当たりそうなネーミングだな」

「なんでもいいじゃない」

「宿で食べる用に1つ買って行きましようよ」

メイサはデユートからまんじゅうを取り上げ、買い物カゴの中に入れた

・ ・ ・

炎神さまは溶鉄山に住んでいたといわれる神様で

『永遠に失われることのない宝物』を作った

伝説として語られている物語だが

デユートとメイサは、その宝を探してこの村に来たのだ

・ ・ ・

「かわいいー！ このぬいぐるみ」

「あ、ストラップもある！」

メイサは次々にいろんな物をタナから取ったり戻したりした

「しかし、炎神さまは本当にこんなにカワイかったのかねー」

デュートの1人言はメイサに聞こえたようだ

彼女はストラップを2つ手にとった

「フリッツには、このストラップを買ってあげるね」

「デュートの分は無し！」

デュートはメイサに理不尽な制裁をうけた

前夜

「ふう〜、楽しかったわね」

「そろそろチェックインできる時間だよ」

「よし、じゃあいったん荷物を置きにいこうか」

3人は宿につづく並木道を進んだ

「明日にはフリッツともお別れかー」

「残念だな」

デュートは自分の肩の高さまで視線を落として、フリッツの顔を見た

「ボクも一緒に行きたいんだけど・・・」

「ねえ、溶鉄山は本当に危険なんだよ」

「どうせ山頂付近には近づけないし、行くのやめたら?」

「うーん、べつに何もなくてもいいんだ」

「ただちよつと気になる事があつて」

「自分の目で確かめたいんだ」

「『神様の宝箱』の手がかりだろ?」

「なにか見つかるといいね」

やはりフリッツも仲間と別れるのが少しさみしいのだろう

・ ・

「そうだ、報酬ももらったことだし今日はボクが夕食をおこるよ」

「いいお店があるんだ」

「岩盤焼きは好きだよね？」

食べ物の話になったとたん、メイサが敏感に反応した

「私、ホルモン！」

「ホルモンばかり食べるわ」

「メイサってホルモン又だったんだね」

抜かれた『響狼の剣』

翌朝

フリッツは宿のベッドの上でうなされていた

メイサはフリッツから体温計を抜き取るとメモリを見て言った

「だめね、熱が下がらない」

「お医者様は心配ないって言ってたけど」

「私しばらくここでフリッツの様子をみることにするね」

デュートはフリッツの顔に視線を向けた

「うん、そうしてくれ」

「オレはちよつと溶鉄山の下調べに行ってくる」

「明日くらいには戻るよ」

「わかった、気をつけてね」

・ ・ ・

デュートが部屋を出て3時間ほどたったころ

メイサは立ち上がりシヨルダーバックを手に取った

「さてと、先にお買い物を済ませちゃおうかな」

「フリッツ、ちよつと行ってくるね」

・ ・ ・

メイサが部屋を出てから間もなく、宿の外から彼女の叫び声が聞こえた

「チョット！」

「返しなさいよ！」

フリッツが3階にある自分の部屋の窓から下を見ると、メイサと銀髪の男の姿が見えた

「この剣は私にこそ必要な物なのだ」

「いいから、とにかく返しなさい！」

メイサは短刀を引き抜き、銀髪の男に向けた

「何も知らんくせに！」

男は奪った『響狼の剣』を抜き、メイサに向けた

予感

フリッツは下でおきている出来事を理解すると、窓から叫んだ

「メイサ！」

先ほどまで熱で寝込んでいたフリッツだが、今はそんなことを言っている場合ではなかった

自室を出て階段を駆け下りると、宿の出入り口の扉を開けた

「メイサ！」

しかし、そこに居るはずの銀髪の男の姿は無く、ただメイサだけが地面に横たわっていた

フリッツは彼女に近づき、地面に広がっている大量の赤黒い血がメイサのものである事を知った

・
・
・

そのころ、デュートは溶鉄山の中腹にさしかかっていた

「デュート……」

居るはずのないメイサの声がデュートに聞こえた

「デュート……」

デュートはあたりを見回したがメイサの姿は無かった

「メイサ？」

デュートは少し急ぎながら山を下り始めた

・ ・ ・

町に戻ったデュートは、病室でメイサの死亡とその理由についての説明を受けた

横になっているメイサは、まぶたが少しだけ開いていた

紅色の瞳は美しいままだったが、窓から差し込む木漏れ日の揺らぎに反応はしていなかった

なにも語らないデュートの代わりにフリッツがつぶやいた

「こんなの酷すぎる」

「メイサは・・・」

「メイサは、ただ剣を取り戻そうとしただけなんだ」

「ボクがもう少し早く駆けつけていれば」

フリッツは、顔を歪めて大きな声を張り上げた

「くそう！」

「ボクはなんて無力なんだ！」

デュートは視線をメイサに向けたまま、フリッツに話しかけた

「フリッツ」

「メイサを斬ったヤツのことを教えてくれ」

デュートは自分の声が悲しみに震えることを抑えることができなかった

大儀名分

数日後

枯れた木が生い茂る森の中で、その男は意外なほど簡単に見つかった

銀色の髪に鋭い眼光、背中には世界に1つの幻の名刀『響狼の剣』

デュートは確信して彼に近づいた

「おい」

銀髪の男は声のする方に向き直った

「ん？」

「いい剣を持っているな」

デュートは静かに話し始めた

「なんだ、お前？」

銀髪の男は警戒してデュートの全体像を確認した

「その剣は女の子を斬ったことがあるか？」

デュートは男の目を見たまま質問した

「女を切った事があつたら」

「それがなんだ！」

男はにわかに殺気を帯び始めた

「なあ、試してみろよ」

「その剣は」

「男も斬れるのか!!」

いつもはやさしいデュートの声が、力強く森を震えさせた

・ ・ ・

真剣勝負を経験した者どうしが、不意打ちではなく正面から戦う場合
2人の間では、太刀を交える前から勝敗はある程度想像がつくのだ
ろう

また、実力が同程度ならば『大儀名分』は勝敗に影響を与えるのか
もしれない

銀髪の男は、剣ではなく言葉で語り始めた

「お前、この剣の秘密が分かっているのか？」

「世界をいい方向へ導けるのだぞ」

「多くの人間の未来を救うためには、なにかの犠牲は必ず必要にな
る」

デュートの下まぶたに、わずかに涙が溜まった

「・・・」

「お前のようなヤツがいるから」

「自分の正義を貫きたければ」

「犠牲は自分で払え！」

デュートは銀髪の男を斬りつけた

そして『響狼の剣』はデュートに触れることなく地面に落ちた

約束

デュートはその場にしゃがみ込み、力なくつぶやいた

「おわったよ、メイサ」

「お前の剣は取り返した」

「こんなものの為に・・・」

「この剣さえなければ」

デュートの語気は自然と強まっていった

「見つけなければ良かったんだ、こんな剣！」

「メイサ、お前がいなかったら」

「何を手に入れたって意味が無いだろ！」

「うおおおお！」

デュートは『響狼の剣』を持って立ち上がり、力を込めて地面に叩きつけた

響狼の剣は小さな音を立て

まるで自分からそうしたかのように

美しい光を放ち

剣身は2つに分かれた

・ ・ ・

デュートは涙ぐみ、ただそこにたたずんでいた
剣の輝きが消えると、彼の横にうつすらとメイサの姿が浮かび上がった

「デュート・・・」

「聞こえる？」

デュートには、すぐ隣に立っている彼女の姿が見えなかった
前を見たままデュートはこたえた

「メイサ？」

メイサは彼の声を聞くと言葉をつづけた

「ありがとう」

「私、あなたと冒険できてよかった」

「本当よ」

「あのとき、誘ってくれてうれしかったな」

「私、あの村ではずっと何かのキッカケを待ってたような気がする
の」

「不自由のない生活を送っているのに、なにか足りないって思った」

「あなた、私を旅に誘うときに言ったわよね」

『運命は自分で切り開くもの』

『与えられた幸せじゃ満足できない』って

「本当だね」

「この旅に出るまで知らなかった」

「命をかけて何かに打ち込むことが、こんなに素敵だなんて」

「ねえ」

「知ってた？ デュート」

「あなたが、伝説上の存在『永遠に失われることのない宝物』を探すんだって言ったとき

「私、信じることにしたんだ」

「宝物があることじゃなくて、あなたのことを…」

「私の旅はここで終わり」

「でも、」

「ねえ、デュート」

「私、生まれ変わっても」

「またあなたと冒険をしたいな」

「『永遠に失われることのない宝物』見つけてね」

デュートは心の中でメイサに思いをつたえた

「ありがとうメイサ」

「2人の夢をかなえたら」

「そうしたら会いにいくから」

「それまで待っててね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8561m/>

The wolf sword memories

2011年10月7日14時49分発行